

【抄録】

第 8 回 日本国際小児保健学会 2024

一般演題 O-1

「Socio-psychological factors of leprosy related to treatment behavior.」

水野友美¹、谷口清州²、菅田健²

1.ユマニテク短期大学 2.国立病院機構 三重病院

【はじめに】

ハンセン病は治癒可能な感染性の皮膚・神経疾患である。古くから、後遺症である身体的変形の恐怖や差別、偏見といったスティグマが存在し、これらの心理的要因が人々を標準治療から遠ざけるリスクを生じる。西アフリカに位置するガーナ共和国は、WHO によるハンセン病の制圧目標は1998年に達成したと発表されているが、新規発生の報告が継続している。そこで、本研究は、標準治療行動に至る因子を探索し、早期介入に必要な要因を検討する目的とした。

【方法と対象】

病因論や受診阻害因子に関する質問、服薬状況、受診に至る経路と情報獲得状況について独自の質問票を使用した。Ankaful Leprosy and General hospital と近隣の回復村、Kokofu General Hospital で実施した。対象者は治療中の罹患者と回復者とし、回収方法は調査者と現地のヘルスケアワーカーによる対面で研究説明をし、同意を得たのち実施した。記述統計として分析を行った。

【結果】

治療に繋がった対象者の情報獲得手法と時期、病因論、通院の契機、服薬状況等をアンケート調査によって明らかにした。識字率の低さ、郊外の居住、自営業、多菌型、回復者の多い回答となった。皮膚皮疹が最も気が付かれやすく、全員が服薬治療の無償化や治療期間を受診時に知らされていた。症状に気付いた時期から受診までの期間は幅があり、気がついた時は既に発症から時間がたっている可能性が示された。身近な人からの情報伝達が多く、ラジオからの獲得はあったものの、ネット情報からの獲得は皆無であった。入院患者は完全指導による服薬が可能であり、回復者に対しての聞き取りでは、振り返りでの確認であること、治療方針の変遷をまたいだ層であったことにより、期待したデータ回収ができなかった。

【結論】

疾患へのスティグマが標準治療の阻害因子になることは疑いないが、疾患への無知が高い阻害因子であることが推測された。次の段階として、受診促進目的の視覚的聴覚的な情報媒体を通じた啓蒙活動が必要となると考えられる。